

『記念誌』をありがとう (※1)第13回卒 池田 秋代 (※2)

先日、親友の前田 (※3) 様より『心のふるさと中村高女』を送って頂き、なつかしく折につけ眺めている。

あの時代は日本も貧しかった時代だったと思うが、女学校に行く人は僅かだった。私の家は商家でしたが、上の兄 (※4) 2人が旧制中学校に行き、その上私まででしたから親も月謝が大変だった事と思う。在学2年の時父が亡くなり、母も相次いで亡くなり長兄の世話になって卒業した。

中村まで4キロ一歩ありバスもなく、中歯の下駄をはき通ったものだ。通学路も今のようでなく、家もまばらで帰りが遅い時は恐い思いをして走って帰った。大雨の時は小泉川が溢れて田んぼは雨水が一杯で下駄までずぶぬれになり、袴をまくりながら遅れまいと学校に急いだ。夏は暑くて町の中を通り抜けると早速皆で袴の中の着物をたくし上げて帰った。白い布レースの縁かざりの日傘がなつかしい。

お花は松岡 (※5) 先生に池の坊を教えて頂き基本が役に立って来た。作法は田中ミツ先生だった。畳のへりをふまない事、座布団を客に出す時は輪の方を前にして等、掛軸のかけ方等も未だに忘れません。座り方のご指導で今もって足のしびれる事はありません。裁縫は苦手で義姉に縫ってもらったこともある。バザーがあり私はリリアン文化刺しゅうで舞妓さんの鏡掛けと、毛糸のベレー帽を編んで出品し、売れない様にと思っていた鏡掛けが早く売れてがっかりしたものだ。

学校近くになると左側に小さな家があり、繭を煮て糸車で巻いているのを珍しく眺めていた。大手先の所ではマルエス・小和口文具店があり、私たちは大体マルエスで買い物をした。

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉「第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 西野宮。中村出身。昭和11(1936)年卒。

(※3) 前田アサエ、旧姓 寺脇。中村出身。昭和11(1936)年卒。

(※4) 兄のひとり、会員名簿から、後藤(旧姓 西野宮)春夫であろう。中村出身。相中第31回、昭和8(1933)年卒。

(※5) 松岡勝。

# 心に残るわが恩師<sup>(※1)</sup>

## 第16回卒 管野 清子<sup>(※2)</sup>

卒業してから50年。引揚者である私は、思い出につながるもの身近に何一つ無く、ただ脳裏に浮かんでまいりますものは、いつも忘れることのない恩師の姿で心に残る各先生方の横顔の一端をのべてみたい。

教頭伏見忠龜先生。とても真面目・温和で一言一言、言葉を噛みしめるようにお話し下さいました。ある時、私達の担任の先生が決まらず、全校生徒のレコードコンサートの最中に1人泣き、2人泣き、やがてクラス全員が泣いて教室に戻っても泣き止まない時、伏見先生がお見えになり、諄々と諭された覚えがある。

竹谷治子先生。私達といくつも違わない若い先生なのに、慣れない相馬の地でいつもしっかりした口調で一息懸命教え導いていられた。休み時間などやさしく静かな声で、「南の国のふるさとはオレンジの花咲くところ」……「早春賦」など唄って教えていただいた。ほんとうに美しい先生だった。

斉藤（現萱場）寿美先生。仙台市在住。黒いスーツにエンジのネクタイ。夏は白いブラウスにネクタイ、黒のスカート。裁縫理論の答案にも、漢字と仮名の使い分けを正しく指導され文字を大切にされた先生だった。

久米芳時先生。若い先生で、国語・数学・体育等の先生だった。校庭の松の木の下で下級生らと何人かで、相馬中学校の校歌や、野球の応援歌・敗戦歌など共に歌ったりした一時もあった。

澁谷<sup>(※3)</sup>先生。相馬中学からお出でになり、週1回化学などを習いました。アルファベットを習い始めたのもその頃である。紳士っていう感じの先生だった。

西坂<sup>(※4)</sup>先生。週1回、マッサージを教えていただいた。それで後々小さな親孝行ができたものだ。

松岡<sup>(※5)</sup>先生。華道、花の道に進む第一歩のきっかけとなったと思う。先生はお身体がお弱いのに上品でやさしく手ほどきしていただき楽しみだった。

そのほか浴衣の早縫競争。紅絹布の運針・紋付羽織・袴・重ね着物・道ゆき雨コートの縫方やバザーのこと。

運動会・修学旅行・学芸会と当時の悲しい戦死者のお迎えなど尽きぬ思い出の数々である。

風花や 学び舎跡の <sup>いしぶみ</sup> 碑 に (平成3年2月)

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998(平成10)年7月6日発行〉「第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 旧姓 相良。中村出身。昭和14(1939)年卒。

(※3) 澁谷松五郎。

(※4) 西坂勝四郎。

(※5) 松岡勝。

## 尊敬のまとの男の先生<sup>(※1)</sup>

## 第18回卒 石田 史子<sup>(※2)</sup>

昭和 15・16 年当時は、日本も勝ちいくさの頃だった。マイクを流れる報恩の歌から、授業が始まった。女の先生が多い中に伏見<sup>(※3)</sup>先生は私共の尊敬のまどだった。久米<sup>(※4)</sup>先生も私達の話題になっていた。

関東方面への修学旅行、遠足での舟遊び、教練は相馬中学校の先生に軍事教練を受けた。

・・・・・・・・ 後 略 ・・・・・・・・

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998 (平成10) 年7月6日発行〉「第一部 第三章 中村高女」より。

(※2) 原文では史子と印刷されていたが、名簿では史子。旧姓 佐藤。八幡出身。昭和16 (1941) 年卒。

(※3) 伏見忠龜 (ただひさ)。日立木出身。相中第18回、大正9 (1920) 年卒。師範。

(※4) 久米芳時。

## 記 念 碑 除 幕<sup>(※1)</sup>

### 第19回卒 高橋 ミヨ<sup>(※2)</sup>

平成元年に建てられた記念碑の裏側には次の文が示されている。

大正 10 年中村町立実践女学校創立。

相馬地方の風土にかなう女子教育が願いだった。校歌の一節に「天地の恵父祖の恩、徳に報ゆる勤儉讓」とあるとおり報徳の訓えを教育の核とし、昭和 23 年学制改革までに 2,602 人の「まごころ」を心の底にしっかり据えた女子を世に出した。後に校名が変り、

昭和 16 年 4 月中村女子職業学校

昭和 19 年 4 月中村女子商業学校

昭和 21 年 4 月中村高等女学校

昭和 23 年 5 月県立相馬高校家庭科別科

として編入され統合発展してきたのである。同時に卒業生は相馬高校「馬城会」に自動的に入会し第二部として今日に至っている。

幾多先輩の協力で掘げられ耕された思い出のこの地に(※この地の畑は卒業生同窓会の寄付で購入されたものであったので)馬城会の総意で記念碑が建立されたのは、同窓生にとっては望外の喜びであり、永く母校を偲ぶよすがにしていきたい。

平成元年9月10日 記念碑除幕

(※1) 『相中相高百年史』 〈1998 (平成10) 年7月6日発行〉「第一部 第三章 中村高女 1 はじめに」より。

見出しはなかったが、内容からこのようにした。

(※2) 旧姓 荒 (ミヨ子)。中村出身。昭和17 (1942) 年卒。職業 (研究)。

(転記&※脚注 村山)